

月刊

# いじろのとも

第十二卷

十月号

一人勝ちの社会

一人勝ち

許す社会は

不平等

ますます拡大

さす社会

最上価値はザバイバル

ザバイバル

することだけが

最上の

価値とらんか

日本でも

革命が

どこで起きても

不思議なし

平和な社会

来ることがない

# 人生を考え直して

## みたい人は（九三）

『正法眼蔵』解説（三七）

仏性の巻を続けます。

仏言、欲知仏性義、当觀時節因縁。

時節若至、仏性現前。

「仏言（いわ）く、「仏性の義を知らんと欲せば、まさに時節の因縁を觀ずべし。時節若（も）し至れば、仏性現前す」といふは、ただ知

いま仏性義をしらんとおもはばといふは、ただ知のみにあらず、行ぜんとおもはば、証せんとおもはば、とかんとおもはばとも、わすれんとおもはばともいうなり。かの説・行・証・忘・錯（しゃく）・不錯（ふしゃく）等も、しかしながら時節の因縁なり。時節の因縁を觀ずるには、時節の因縁をもて觀ずるなり、払子（ほつす）・杖（しゅじょう）等をもて相觀するなり。さらに有漏智（うろち）・無漏智（むろち）、本覺・始覺・無覺・正覺等の智をもちみるには、觀ぜられざるなり。

当觀といふは、能觀・所觀にかかはれず、正觀・

邪觀等に準ずべきにあらず、これ當觀なり。當觀なるがゆゑに不自觀なり、不他觀なり。時節因縁なり、超越因縁なり。仏性なり。脱体仏性なり。仏なり、性性なり。（は漸の下に耳）

参考までに、現代語訳として玉城康四郎著『現代語訳

正法眼蔵2』（大蔵出版刊）を引用させて頂きます。

仏がつぎのようになされた。

「仏性の義を知ろうと思つならば、まさに時節の因縁を觀ずべきである。時節もし至れば、仏性が現前する」といふは、ただ知だけの問題ではない。「行じよ」と思つならば、「証悟しようと思つならば」、「説こうと思つならば」、「忘れようと思つならば」、「みなここに当てはまる。

「ここにいう」「説く」「行ずる」「証悟する」「忘れる」「錯（あやま）る」「錯らない」などということも、すべて時節の因縁である。時節の因縁を觀ずるには、時節の因縁をもつて觀するのである。修行者の持つている払子（ほつす）や杖（しゅじょう）

う( )をもって観するのである。有漏智(うろち=煩惱のある智恵)・無漏智(むろち=煩惱のない智恵)・本覚(本来の悟り)や始覚(修行の結果の悟り)・無覚(悟っていないこと)や正覚(正しい悟り)などの分別を用いては、観することはできないのである。( はてへんに土ふたつ )

「当観」というのは、観ずるものと観ぜられるものとはかかわらない。また、正しい観、まちがった観などにも関係しない。まさにこれ当観である。当観であればこそ、自分の観でもない。他人の観でもない。時節因縁そのものである。因縁を超越したものである。仏性そのものである。透脱した仏性である。仏性そのものである。性性そのものである。

原文の意味は、ほぼ、現代語訳に訳されています。

この部分は、出だしにあります仏のことば通り、「時節の因縁」をめぐって書かれています。つまり、「仏性とは何かを知りたい」と思えば、「時節の因縁を観ずべし」だ、ということ。そうしていれば、「時節が至って仏性が現前する」ということになる、ということなのです。

ここで難しいのは、「時節の因縁を観ずべし」という部分です。先ず、「観ずべし」とは、何なのでしょう。

中村元著『佛教語大辞典』(東京書籍刊)で「観」という字を引いてみますと、第一の意味が次のようになっています。

真理を観ずること。心静かな清浄な境地で、世界のありのままを正しくながめること。観念する。観察する。心静かな観想。瞑想。

ここにありますが「真理を観ずる」とか「心静かな清浄な境地で、世界のありのままを正しくながめる」といったことは、実は、いくら「あたま」でそうしようと思ってもできることではないのです。

いつも言うことですが、それには、修行がいるのです。毎日のたゆまぬ精進がいるのです。それが、その次に出ています「心静かな観想」であり「瞑想」なのです。こうした「観想」や「瞑想」を、毎日、続けるとき、「時節の因縁を観ずる」ことができるのです。それが、「仏性の義を知る」ことになる、ということ。ですから、「知る」といっても、そこには修行が伴うわけで、ただ、普通に「あたま」で知るのではないのです。

それは、ソクラテスが「無知の知」という時の「知」にあたっています。

理屈っぽいことになって恐縮ですが、この知は「た

ましい」と、「あたま」と、「からだ」と、「こころ」を統合して、「知る」働きなのです。もつと言いますと、こうした四つの意識の働きをすべて完全に統合するということは、 髄識（＝無意識）に宿っている、 精髓（生命蔵識・煩惱蔵識）と神髄（如来蔵識）を統合することでもあるのです。ですから、単に「あたま」で考えて（＝分別して）納得できれば、仏性の義についての「知」が実現できるわけではないのです。

次に「時節の因縁」ですが、これを理解することは、とても難しいことです。この世で起こることは、すべて時節の因縁によるのですが、そういわれても、「ああ、そうですか」と言つて納得することは、おそらくできないのではないのでしょうか。

それができるということは、実は、自分に起こった出来事、つまり、自分が生まれてこのかた、体験してきたことを、すべて「時節の因縁」として受け入れることができるということでもあるのです。

私の体験でいいますと、真言密教の修行をして、はじめて、私が体験してきたことは、すべて因縁によるのだと、実感することができたのです。

ああした、祖父母・両親のいる、あの家に、こういう素質としての心身をもって生まれたのも、また、その後

の、思い出される全ての体験が、すべてがすべて、因縁によるものであったと、心の底から実感することができた、ということでした。

それは、自分に起こった出来事をすべてを受け入れることができるということなのです。自分の生まれも、うけた仕打ちも、自分のなした業も、すべて仏さまのはからいであつたと、心の底から納得できるということなのです。つまり、あらゆる体験に、否定するものが無く、すべて、肯定できるものばかりということなのです。

別の言い方をしますと、物心ついて以来、自分が為して来たことは、自分ではからつたつもりだったのですが、今となつて見ますと、すべてが仏さまのはからいだった、と心の底から思えるということなのです。『西遊記』の孫悟空と同じで、雲にのつてどこまで飛んでいっても、仏さまの手のひらの中から出ていかなかった、というのがと同様な思いがするのです。

出だしの仏さまの言葉で言いますと、このとき、私に、「仏性が現前した」のだと思うのです。ですから、仏性の義を知る、ということは、ただ、「あたま」で考えて（＝分別して）分かることではないのです。そういう意識水準の働きをすべて超越しているのです。それを、道元は、「超越因縁」と言っているのです。

最後に「時節もし至れば、仏性が現前する」という点については、注意がいらしますので、そのことを少し述べておきたいと思います。

確かに、時節が至れば、仏性が現前するのですが、でも、これを読んで、「時節が来なければ、仏性は現前しない」と考えて、時節が来るまで、何もしないで、あるいは怠けて、時を過ごせばよい、というように思う人があるかもしれません。でも、それは、間違いです。

これまでの記述でお分かりだと思いますが、仏性は磨かなければ輝きだして来ないのです。「客塵」の垢を磨かない限り、光は射して来ないのです。

私たちにできることは、ただひたすら、仏さまの教えを信じて、その教えに従って精進する（「磨く」）ことだけなのです。その結果として、時節が至れば、まさに勝手に、仏性が現前するのです。

でも、仏性が現前しないからといって、落胆することは、ありません。人間は、ただひたすら、精進することが大切なのです。精進していれば、現実の生活で間違いを犯さなくてもよくなるからです。人生で大切なことは、悪をなさず、善をなすことです。他者の幸せを考えることです。現前しなくても、精進していれば、無限に仏性に近づいて、そうなっていけるのです。

## 自作詩短歌等選

### 知る権利と知らせる義務

知る権利に

対応するものは

知らせる義務

なのに

知る義務が

大切という

どこまでいっても

転倒している

日本人の

権利と義務の感覚

### 心の支えとは

他己という

本質的な支えを失い

何らかの

不適応行動を

犯す人が増えている

そうしたとき

必ず言われるのが

援助制度の必要性

多くは

カウンセリング

そんなもので

本当の心の支えが

できると思うな

## 中国共産党の行く末

中国の

共産主義は

どこまで続く

江沢民国家主席は

共産党八十周年

記念大会で

私営企業主を

共産党員とする

改革案を発表

どんどん進む

市場経済化

ハングリー精神に

支えられた

技術力の発展

生産力の増大

貧富格差の拡大

軍事力の増強

伝統的価値の否定

でも

これ以上

ファッショ化

しないことを

祈りたい

また

偉大な老子への

回帰を望む

## 二つの悪

テロは悪

一人勝ちも悪

悪と悪とが

互いにやりあう

末法の世

## 虐待を減らすには

児童虐待防止法が

できたのに

児童虐待は

いっこうに減らず

逆に

ますます

残忍になり

増えている

対症療法的に

法律を作っても

何の解決にも

なっていない

必要なのは

他己を育てる教育

人を信じる教育

こころを育てる教育

信仰を取り戻す教育

奉仕・お布施の  
心を養う教育

## 保険料目当ての殺人

親が子に

生命保険をかけて殺し

保険料をだましとる

という事件は

これまでもあった

でも

このごろは

子が親に

生命保険をかけて

殺す時代になってきた

鳥取県米子市で起きた

親殺人事件

## テロへの報復

国がうけた  
テロ被害への報復は  
いけないと言う

個人が親族を  
殺されても  
自分でかたきを  
とってはならないのと  
同じだという

でも  
個人でも  
被害にあえば  
国家権力によって  
逮捕し処罰して  
報復をしている

問題なのは

国際的に確立した  
権力機構がないと  
いうこと

もしあれば  
当然  
逮捕して処罰すべき  
なのである

その権力機構を  
各国が独自に  
おこなっているだけ

## 新たな価値の創出

小泉さん  
雇用創出  
よいけれど  
新たな価値を  
生むもの探せ

## 自作随筆選

### タリバンは悪で米は善か

周知のとおり、九月十一日（火）の夜十時少し前に、アメリカで前例のない、悲惨なテロ事件が起きました。これは、「自由主義・民主主義」に対する敵対行為であると、アメリカ大統領は演説で、言っていましたし、また、多くの国の代表者が、テロに対する非難で一致しました。

勿論、暴力的テロが許されざることは、言うまでもありません。でも、果してアメリカは単なる被害者で、オサマ・ビンラディン氏と彼の率いるアルカイダや、こうした人たちを保護するタリバンは、単なる加害者なのでしょうか。

勿論、テロの直接的な加害者は、ビンラディン氏などでしょうし、そして、そうした人たちが悪事をなしたことは明らかですが、では、被害者であるアメリカ人は、どこまでも善い人たちなのでしょうか。彼らにテロを誘発するような原因はなかったのでしょうか。

このことを、少し考えてみたいと思います。

私は、アメリカもテロ集団も、どちらも「相対」の中にいて、後者が悪なら、前者も悪であるように思えるのです。なぜなのでしょうか。

その理由は、アメリカが提唱し、G7を構成するその他の先進諸国や、WTO加盟国も受け入れている、自由競争、市場原理至上主義、グローバリゼーション（国際化）の三原則を見れば明らかなのです。

例えば、自由競争を取りあげてみますと、この原理は、私には、人間の原理のように思えないのです。この原理は、ダーウィンが明らかにしました、動物のレベルを支配する原理のように思えるのです。それは、適者生存や自然淘汰、といった進化論の原理の延長線上にある同じ水準の原理のように思えるのです。

人間が人間であるのは、自由競争に打ち勝って、生き残るからではありません。それは、動物でもできることです。

私の理論の根幹をなす考え方ですが、人間が人間であるのは、「人の心を感じるころ」をもっているからなのです。人の痛みを我が痛みとし、人の喜びを我が喜びとすることができからなのです。自由競争では、この「ころ（＝人間性）」は無視されます。そこでは、強い者が、どこまでも勝つのです。

なるほど、自由競争主義者は、敗者のためには、その人のことを思いやってセーフティネットが用意されている、といつも言いますが、それは、詭弁に過ぎません。

もし、それが詭弁でないとするならば、自由競争や市場主義のグローバリゼーション（国際化）を唱えるアメリカやそうした主義を是認する国々は、当然、国際的にセーフティネットを張らなければなりません。でも、そうならないことは、誰の目にも明らかです。

皆さんもご存じかも知れませんが、アフリカでは子どもが、飢えや病気で「毎日、2〜3万人ずつ」死んでいます。年間では、毎年、一千万前後の人（日本の人口の一割近い人）が死んでいることになりました。

大騒ぎしている今回のアメリカのテロ被害で死んだ人は、それに比べれば「たった」六千人ほどです。アフリカの飢え死の子どもと比較して、その数のなんと微々たることでしょうか。

こうした貧困は、アフリカだけではありません。多くの開発途上国にも、多かれ少なかれ当てはまっています。いま問題になっていきます地域の諸国も、石油資源をもたない国々では、事情は同様です。最近、頻繁にテレビに映し出されるアフガニスタンやパキスタンなどの町の様子や人々の服装、暮らしぶりなどを見てみれば、そのこ

とは明らかなのです。

アフリカをはじめこうした貧しい国々の、どこにセーフティネットが張られているのでしょうか。世界的にみて、まさに力のある強い者が勝つ世界になっているといえるのです。

確かに、テロでは「直接的」な暴力的方法で殺人を犯します。しかし、自由競争でも、弱者を「見殺し」にするという「間接的」な方法で殺人を犯していると言えるのです。

困っている人がいれば、自分を差し置いても助けるのが人間の人間らしさです。それは、アメリカ人の多くが信仰するキリスト教の教えにありますし、キリスト教に限らず、仏教にも、他のどんな宗教にもあると思います。

また、こうした強者の論理のもつ矛盾は、国際間に見られるだけではありません。アメリカの国内にも、また日本にも、現れています。その一つは、貧富の差のますます拡大です。両国とも、ホームレスの人、あるいは路上生活者が増えているのです。

自由競争・市場原理至上主義といった、動物原理を国際化して、世界中の弱者から搾取している（不倫盗戒に反している）、先進諸国の「強い者勝ち主義」を改めなにかぎり、それに対抗した動物原理としての暴力革命

（テロ）は、おさまることがないように思えます。たとえば、多くの先進諸国が結束して、今回のテロを退治することができたとしても、同じ地域で、あるいは違ったアフリカやアジアや南アメリカで、今後も新たな革命が起こってくるのを、避けることはできないように思えます。

相対な者が、相対な原理に執着し、お互いが「自己」を主張しあう限り、人々の間に争いは断えられません。

相対な存在である人間は、絶対の境地に至った人の教えに則って、生きる以外に、争いを避ける道はないのです。たとえば、その教えは、仏教の説く「不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不飲酒の五戒です。

こうした絶対な教えをないがしろにしたり、絶対な宗教を自分勝手に相対レベルに引き下ろして解釈したり、また、相対な自己追求の制度である民主主義（自由主義・個人主義）や民族主義を今のまま追求したりして行く限り、人類に未来はありません。

昨今のアメリカをはじめとする先進諸国とタリバンとのやり取りを見ていますと、もう人類滅亡の日も遠くないように感じてしまいます。核による、あるいは核に対するテロがいつ行われるか、極めて危険な状態にあるように思えるのです。

いまこそ、四聖の教えに戻る時ではないでしょうか。

## 釈尊のごとば（一〇四）

法句經解説

（三四〇）（愛欲の）流れは至るところに流れる。  
（欲情の）蔓草は芽を生じつつある。その蔓草が生じたのを見たならば、智慧によってその根を断ち切れ。

こんな偈は、現代では全く通用しなくなっているのではないだろうか。悲しいかなです。

さて、愛欲とは何かですが、因みに、中村元著『佛教学大辞典』（東京書籍刊）で「愛欲」の見出し語を引きますと、次の五つの意味が載っています。

愛は貪り愛する意。親愛。欲は貪り欲する意。深く妻子などを愛すること。五官の対象を享樂すること。妄執。盲目的な衝動。性愛を享樂すること。煩惱。

一般的には、の異性に対する性的な欲望のことをいうのだと思いますが、仏教では、の煩惱まで含んで、ずっと広い意味で使われていることが分かります。

ところで、この偈には、の「深く妻子などを愛すること」をも断ち切れと言っていることになりましたが、なぜなのか、理解に苦しまれるかもしれません。

これは、妻子や親・兄弟を深く愛することは、実は、そうした親族に執らわれを持つていることが圧倒的なので、それを戒めているわけです。

親族に執られないということは、他の誰に対してでも同様ですが、自分が他者（愛する親族）から愛を受けることを期待しないということなのです。

例えば、多くの親は子どもを自分の延長線上に位置づけて、自分の野望や夢を実現する対象にしたり、老後には、自分を養い、世話をする者と捉えたりします。それは、我が子を愛している証拠であり、また、その必然的な結果のように思っているわけです。

でも、それは、子にとつてとても迷惑なことです。そんなことをしますと、子は、「産んでくれと頼んだわけでもないのに産みよって、勝手なことを言うな」と言います。

子には子のもって生まれた素質があるのです。その子の特質や特徴、いわゆる個性があります。子どもに執着して、子を自分の身代わりのように思ったり、自分の世話に縛りつけたりする親からは、ますます、子どもの心は離れていきます。

逆に執着しないで、その子のことを中心にして考えてやりますと、子は、お世話になったから、今度は、自分

が親を世話する番だと、いつような子に育っていきます。ただ、その子にどこまでも愛情をかけてやれば、その子も愛情が豊かな子に育っていくのです。それが、親愛に對してこの偈が言っていることなのです。

(三四一) 人の快樂は喜びこるもので、また愛執で潤(うる)おされる。実に人々は歡樂にふけり、樂しみをもとめて生まれと老衰を受ける。

たびたび書いてきましたが、現代人は、信仰を失い、自己に閉じて、自己の情動への執着をどんどんと強めています。

今、タリバンとの関係で世界中の注目を集めています。アメリカは、「自由競争・市場原理至上主義・グローバリゼーション」を目指していますが、それらは、自己に閉じた強者のエゴ追求の原理ではありません。それを支えるものは、自己の快樂にしか過ぎないのです。もう少ししやれた言葉でいいますと、生活の利便性・快適性・享樂性の追求ではありません。他でも書きましたが、そこには、他者の痛みを我が痛みとし、他者の喜びを我が喜びとするというような他者への配慮(「他己」)は、まったく欠落しているのです。他者が飢え死していても、

何ら手を施すことなく、文字通り「見殺し」にしているのです。

見殺しにするだけではありません。右にあげた原理を掲げて、そうした貧しい人たちの血と汗の結晶を搾り取り、それによって自らは繁榮の美酒に酔っているのです。愛執で潤されているのです。歡樂にふけているのです。その結果は、「生まれと老衰を受ける」ということになるのです。

積尊は、人生の苦しみとして生老病死の四苦をあげられました。この「生まれと老衰を受ける」と言いますのは、この四苦のはじめの二つと考えていいのではないのでしょうか。生の苦しみは、一般には自分の生まれが自分の望むようなものではないことを言いますが、ここでは日ごとに生きていくことをさしていると思います。仏教では、人間は刹那に生死を繰り返していると考えていますので、そう言えるわけです。

人生で快樂に耽つて過ごす時間は、その時は楽しく長い時間を感じるかも知れませんが、後で考えれば、極めて短いものに思えるものです。そうした生活は、あつという間に過ぎ、浦島太郎ではありませんが、気付いたときには、もう白髪の老人になっていた、ということになるのです。

後記

一、この間まで、暑い暑いと思っていました。もう朝晩は、薄ら寒い感じさえしています。

二、収穫の秋となり、周辺の田んぼでは、稲刈り真っ最中です。でも、お米の値段もだんだん下がり、乾燥代や籾刷り代を引けば、一俵（六十kg）一万三千円程度にしかならないそうです。一反（十反）で八俵とれて十萬円の粗収入になります。一町（一畝）で百万円です。この引田では、私の知っている人で、一番たくさん作っている人は四畝ですので、米では四百萬円の粗収入ということになります。でも、その人のトラクターやコンバインや田植え機は、とても大型で、コンバインなどは五百万円を越えるそうです。五十歳台の夫婦二人で、朝、夜明けから日暮れまで働いています。真夏の炎天下でも、畑で仕事です。他人の懐具合をとにかくいう積もりはありませんが、果してこのご夫婦の純収入がどれほどになるか。おそらく夫婦で役場に勤める人たちの収入にははるかに及ばないのではないのでしょうか。

三、何年か前に制定されました「新農基法」は、大規模農業を目指していますが、もしそれが実現しますと、日本の大多数の農家、特に中山間地の農家は潰れることになると思います。

四、何度も書いたと思うのですが、食料品をはじめとする第一次産品は、原則、輸出入禁止にすべきです。できるだけ均等にそれぞれの人が住む地域で生産すべきです。

そうしないと、いろいろな意味で、人間の生存にとつてとても危険なことが起こると思います。

五、輸出入禁止によつて一次産品の値段が上がれば、日本の農業や林業も復活し、若者も農業につく人が増えることでしょう。それ以外に、日本の農業を建て直す道はないように思えます。たとえ、GDPは下がってもです。

六、分かつてもらえませんが、実は、それが、家庭を守る道、こころを豊かにする道でもあるのです。

月刊 こころのとも 第十二巻 十月号 （通巻 一四二号）	平成十三年十月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 （ひびきのさと 沙門）中塚 善成 <small>（しょうせい）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

